

兵庫県 神戸西農協

〒651-2124 兵庫県神戸市西区伊川谷町潤和1058
☎078-974-2800

エクセレント農協シリーズも、今回で終わりである。掉尾を飾るにふさわしい農協組合長をインタビュしてきた。都市化や混住化が進む中、21世紀型農協のモデルと呼ぶべき兵庫県の神戸西農協である。今井和男組合長は、兵庫県農協中央会の会長も務める農協界の重鎮である。都市と農村の調和のとれた市民らと共生する農協のあり方を探ってみた。

神戸市西農協は、新大阪方面から山陽新幹線に乗ると、西明石駅の少し手前の右側に本所ビルが見える。農協の管内は、海側から山地へ伸びている。西側は、この4月に完成した明石海峡大橋がある明石市。北側には刃物で有名な三木市。高度成長以降、神戸市のベッドタウンとして発達してきた地域である。多くの農家が宅地に生まれ変わった。管内の農家は超リッチである。貯金は1500億円を突破する。共済

もすごい。長期共済期末保有高は4800億円だ。金融事業が中心の都市型農協と思いきや、農産物の販売は90億円もある。県下では三番の売上高を誇る。都市型の農協でありながら、というよりも都市型だからこそといった方が正解のようだ。

そんな中での「ベジタ・コム・プラン」の推進である。農協が数年前からスタートさせた。「ベジタ」。ベジタブル、野菜のことである。「コム」。コミュニティ、地域社会のことだ。健康な作物作りの羅針盤、顔の見える流通開発、地域社会への貢献。この三つがコンセプトだ。「農」と「住」との調和を目指す。その端緒は農地の有効利用だった。今井組合長の考えを聞いてみよう。



生産者と消費者の交流を深めるため、コープ神戸と供に青空フォーラムを開催した

「農」、「住」調和目指す ベジタ・コム・プラン推進で

良い農協はここが違う！
エクセレント農協探訪記

20



農業評論家
土門 剛

どもん たけし/1947年大阪市生まれ。早稲田大学大学院法学研究科中退。「省益に走った農水官僚の100日」(中央公論94年3月)、「食管死守で焼け太る農水官僚」(This is 読売94年3月)、「懸案見送られた食管改革」(同94年7月)、「食管制度のあり方に関する調査懇談会」(エコノミスト94年8月)など、農業や農協問題についての規制緩和と国際化の視点からの論文を多数執筆。主な著書に、94年11月「農林中金の憂鬱」(日経フィナンシャル94)、93年10月「市場開放決断の日」(日本経済新聞)、92年11月「農協が倒産する日」(東洋経済新報社)、「穀物メジャー」(共著/家の光協会)、「東京をどうする、日本をどうする」(通産省八幡和男氏と共著/講談社)、「新食糧法で日本のお米はこう変わる」(東洋経済新報社)など。大阪府米穀小売商業組合、「明日の米穀店を考える研究会」各委員を歴任。

の専門的な部署を設けたのもそんな理由からだった。今の緑農開発部のことである。

今井組合長の話だ。

「みなさん先祖伝来の土地ですんでね、まだ古い組合員は土地を守らねばという意識が相当強いようです。当然組合員としても、農地を売ってしまうよりも、何とか資産活用ということを考えます。でもね、活用できない部分も



今井和男代表理事組合長

ありますのでね。そのあたりは生産緑地を選んでおかないと、高い固定資産税を払わされます。それで先祖伝来の農地も守るには、地域の農業をパワーアップしないといけません」

生産緑地を選んで固定資産税は高いという。管内の一等地で宅地並課税で一反あたり40万円らしい。区画整理した宅地の固定資産税は40万円から50万円が平均。都市農地の大きいなる悩みである。

むろん小規模農地である。この条件を生かしての営農だ。武器は都市型農業。日本一の生協、コープこうべに向けての産直が始まったのは、10数年以上も前のことである。最初は完熟梨、中国野菜(チンゲンサイ)など。平成3年には「ベジタ・コム」が本格始動。

生協に限らずスーパーなどに野菜を直接に供給する「ダイレクト便」となった。その量は野菜販売の1割になった。見える農業。ベジタ・コムの最大のポイントである。日本一の生協の、日本一の消費者との交流。5月にはレンゲ祭り、秋の収穫祭、市民らと話し合う青空フォーラムなど、年間のイベントも目白押しだ。

最近「エコロジー・プラン」を推進。これも三つのコンセプトがある。営農活動、生態系を尊重した地域循環型農業の推進のことだ。エコルート。販売活動、自給・安全を指示する消費者にむけた新たな流通の開拓をいう。エコ・キャンペーン。交流・広報活動、土地を支える農村の大切さを交流や広報活動を通じて訴えらる。

とある。

「ベジタ・コム」や「エコロジー・プラン」推進のため、農協には育苗センターまである。今井組合長の方針は明快だ。

「農産物はこんな競争の時代ですからね、コストを下げなければ採算性の合うもんじゃないといけません。種から直接直播きで生産するものと、移植するものとありますけど、移植できるものは、すべて育苗した中である程度苗を大きくしてから、

定植して圃場での生育期間を短くして、回転を多くして収穫を多くしないと、これからの競争に勝てないですから。とくに都市型農業ではね。土地がもともと高いんでね」

水稲は昭和54年から。野菜や花は60年頃から。野菜は移植したときに植え傷みがないようにポット苗だ。なおかつ野菜も機械移植である。水稲は82000箱、野菜32000鉢、プラグ苗は花が970万本、野菜690万本。平成8年度に農協が出荷した数量だ。

管内の農家は約4000戸。専業は1100戸。第二種兼業農家は2400戸。兼業率は6割だが、専業といっても60歳以上の高齢者が、圧倒的に多い。水稲面積は1600ha。春夏作そさい面積530ha。秋冬そさい面積は450ha。果樹180ha。花40ha。平成8年度の農産物の販売額は89億円だった。

農協管内は、神戸市西部に広がる新興ベッドタウンだ。当然、金融機関どうしの競争は激しい。郵便局や銀行などにも預け入れられている組合員も多い。それでも平成8年度で1461億円の貯金高となった。正組合員7200人、准組合員2900人。正准併せて1人1500万円の貯金高になる。金融激戦区での1人1500万円は大健闘だ。

「都銀などが相当はいり込んできて競争は激化するばかりですよ。最近金利での攻勢が強まってきた。これに對抗するには、日常的に組合員とのコミュニケーションを強化し、営農なら営農、生活なら生活、資産管理なら資

産管理と、それぞれのステージに合わせ相談を受けています。それが金融面もつながってきているようです。総合的にお世話することによって、金融面も保険も含めて、これだけ組合員の信頼を得ている理由だと思いますね」都市型農協だけに、最大のポイントは、資産管理事業だ。今井組合長の説明である。

「資産管理事業のお世話をすることによって、マンションやアパートなどを建設する時の資金の貸付もできずし、なおかつ完成して入居すれば、その家賃などの収入は農協口座に振り込んでもらえます。そういうふうな循環的なシステムを組まなければ、都市型農協は単発的な対応では、これからのビッグバン時代に、取り残されるだけです」

そうやって農協が手がけた賃貸住宅は約50000戸、うち6割が資産管理の対象だ。そんな実績から、東の横綱が横浜南、西の横綱は神戸西農協と呼ばれるようになった。株式会社神戸西農協不動産である。

今井組合長はいう。

「銀行が証券や保険を扱えたり、あるいは保険会社が証券や銀行業務も兼営できる、つまりは何でもありというのが、金融ビッグバンでしょう。農協も、フィールドである農地や農業を軸に、金融、証券、保険(共済)を手がけ、資産管理事業まで手を伸ばす。ビッグバンでは至極当たり前のことなんです。これができない農協は21世紀には消滅しかねない。そんな大激動期がやってきているんですね」